

歴史紀行

なごやの 鎌倉古道 をさがす

池田 誠一

【11】

二村の山へ…歌い継がれた峠道

1 二村の山

名古屋の東南の市境、わずかに豊明市に入った所に二村山という標高726mの山があります。鳴海丘陵のこの小さな山が、中世という時代には、天下に名の知られた歌枕でした。

この山を有名にしたのも、中世以前の11世紀に、13歳の頃の東海道の思い出を書いた『更級日記』かもしれません。そこでは、「二むらの山の中にとまりたる夜、大きなる柿の木のしたに庵を作りたれば、夜一夜、庵の上に柿の落ちかかりたるを、人々拾いなどす」と、野宿だった当時の二村山を描いています。

一部の資料には二村山は三河の国とされており、二村山も南に行った岡崎や豊川ではな

いかという議論もありますが、歌枕としてはこの豊明の地とする説が多いようです。

源頼朝は、上洛の途上、「よそに見しをざさが上の白露を たもとにかくる ふたむらの山」と詠って珍しく続古今集に選ばれています。

中区の古渡から、何本かのルートに分かれ相原郷にたどり着いた古道探索の旅は、相原付近で合流し、ここからは1本になって東南の二村山を越えることになります(図1)。

2 二村山への道

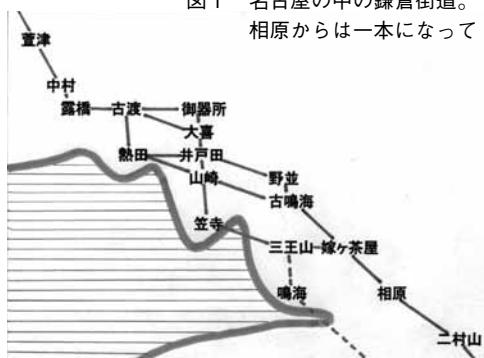
(1) 相原郷

相原は古くは「粟飯原」として、足利尊氏が所領を与えた文書に出てくるといいます。前回紹介したすぐ西にある宿地は、戦国時代に街道が海側の東海道筋に移る時に2度にわたって移動しており、古鳴海や嫁ヶ茶屋に比べて拠点的な集落であったことが伺われます。鎌倉街道末期の鳴海の宿は、ここ相原・宿地にあったとみれないでしょうか。

(2) 桶狭間の戦いと鎌倉街道

中世末期の桶狭間の戦い前の両軍の通過経路の中に、相原から二村山への鎌倉街道が登

図1 名古屋の中の鎌倉街道。
相原からは一本になって



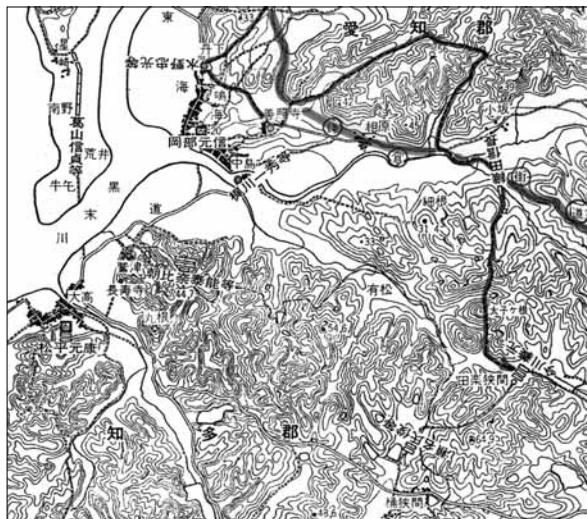


図2 『日本の戦記』の中の桶狭間の戦いで想定された信長ルート

場します。織田軍が迂回したとする『日本の戦記』の経路では、相原を避けていますが、その後は街道を経て桶狭間に向かっています(図2)。一方今川軍は駿河から鎌倉街道を北上し、沓掛城に泊まった後、鎌倉街道に出て大高方面に向かいました。

面白いのはその戦場です。戦いは「桶狭間」と通称されますが、実は「田楽狭間」だったとか、別の「田楽坪」だったともいわれるのです。司馬遼太郎は『国盗り物語』では「正しくは田楽狭間」と云っていますが、『街道をゆく』では、「田楽ヶ窪」をおわせています。この田楽ヶ窪は相原から二村山に向かう途中にあり、今は保健衛生大学と病院が立ち並んでいます。ここも桶狭間の戦いのどこかのステージに関わっていたのかもしれません。

(3) 歌枕・二村山

二村山は愛知県東北部の山地から知多半島に延びる尾根上にある小さな丘です。しかし濃尾や三河の大きな平野の平坦な地域を通過してくると、わずかな峠道が歌心になったのでしょうか。ここは、先に紹介した頼朝の他、執権北条泰時の和歌もあり、また藤原俊成、飛鳥井雅経、西行など中世の有名な歌人たちも二村

山を詠みました。

(4) 鎌倉街道のルート

相原から二村山への道筋は、大きく述べれば一本になります。相原郷の山側を抜け、諏訪神社の前を通って扇川を渡ります。川の先は、明治時代にもあった旧道を通ったという説と、少し東に行ったハツ松の蔵王堂を通ったという説があります。後者には、途中に江戸時代まで義経甲掛松が残っていたといいます。二つのルートは少し行って合流し、ピークを越えます。平坦になった田楽ヶ窪を通り抜けるとわずかな上りで二村山の峠です。

3 鎌倉街道をさがす

それでは前回終点の相原郷の入口から二村山を目指して歩いてみましょう(図3)。地下鉄の野並駅からならばバスで緑高校を下車し、北に坂を上ります。はじめの辻が前回の終点で、ここで右に曲ります。

道は淨蓮寺に向かって進み、寺の裏を通過しています。この寺は桶狭間の戦いの後、今川義元の家来が出家して建立しました。戦国時代の末にここに移ったといいます。街道跡といわれる道は寺の東から小路をたどります。面白いのは寺の1本東から駐車場を抜ける所で、昔の道のルートがブロックを埋め込んで残しております。街道跡といわれる道はそこを抜けて段を降り、左・右と細い道を辿ってバ



図3 相原から二村山へ(明治中頃)



▲宅地化の進むハツ松

◀諏訪神社

ス通りに出ます。前には諏訪神社の森があり、正面に境内への歩道があります。この付近も街道跡といわれ、中に進むと左手に神社の社殿があります。この神社は平安時代の創建とされ、鳴海で一時は1、2を競う神社でした。

境内を出ると突き当たるので右に行き幹線道路に出ます。東に少し行くと斜めの細い旧道が残り、その入口には庚申堂がひっそりとたっています。その先はしばらく旧道の面影はありません。第2環状線の工事現場を通り、鴻仏目の交差点を右に曲って扇川に架かる砂田橋を渡ります。扇川は蛇行していましたが今は改修されてまっすぐになりました。

砂田橋を渡ると東に2本目の道が旧道にな

ります。ここから先の左手はハツ松で、街道跡の候補には前述したように旧道説と東側説がありますが、東側は今、区画整理の最中です。少し先で合流するのでここではそのまま旧道を行くことにします。

旧道を進むと道は徐々に上り始めます。左手は宅地化が進行中、右手は完全に住宅地に変わっています。信号の出来た交差点を過ぎて少し行くと右手に学校が見えます。この学校は鎌倉台中学といい、鎌倉街道が通っていたことを残そうということで選ばれました。ここで道は先ほどの東側説のハツ松からの道と合流し、しばらく行くとなだらかになります。左手には宅地化の進む合間から名古屋の市街が見渡せます。やがて再び登り始め、右が競馬場の厩舎の堀になり、続いて駐車場になります。ここは名古屋と豊明の市境です。道のピークに上りきると左右が開け、右には遠くの競馬場の建物が大きく見え、左には市街の展望が広がります。

ピークを過ぎると道は下りになり山道になって愛知用水を渡ります。車が通らなければ



鎌倉台中学。命名のいわれが書かれている



濁池のむこうに保健衛生大学の建物が並ぶ



二村山の峠道



江戸時代につくられた袈裟切り地蔵

…という林の中を抜けて濁池に出ると、正面には保健衛生大学の巨大に見えるビル群があります。池は鎌倉街道の頃ではなく、池の底が道だったのでしょうか。この先二村山までの窪地が桶狭間の戦いに関わったかもしれない田楽ヶ窪になります。

池を通り過ぎると旧道は左手を行きますが、工事中なので大学病院の中を道なりに進んで建物の東側にでます。旧道は大学病院の東側の駐車場の北側を通って大学の立体駐車場の方向に進んでいます。旧道を追って車道を渡り、少し奥に行った駐車場のゲートの所で左の建物の裏に行くと、二村山への旧道が通っています。木々に囲まれて細くまっすぐな、いかにも街道の跡という道を進むと5、6分で鎌倉街道という石碑のたつ二村山の峠に飛び出します。

峠は平坦で、その左奥に地蔵堂があります。中には3体の地蔵菩薩がありますが、左側の頭部が欠けた石像には後ろに「大同二年(807)」と刻銘があるといい、最も古いものです。峠地蔵とか身代り地蔵と呼ばれており、**身代り地蔵**とは平安時代の末にこの地域を拠点としていた大盗賊熊坂長範が旅人を斬ったと思ったら地蔵だったという逸話によるものです。

峠からは北に頂上に上る道があり、頂上に



もつとも古い
身代り地蔵さん

は上半身と下半身の分かれた袈裟切り地蔵があります。今は大きな木が茂って一部の方向にしか視界はありませんが、当時は三河の山々からあゆち湯、濃尾平野の向こうまで望めた景勝の地でした。今は横に展望台が作られており、それを上ると名古屋市街から三河平野まで望むことが出来ます。帰路は、峠から保健衛生大学の前に戻ると幾つもの方向にバスが出ています。

4 ロマンの峠道

この地域の鎌倉街道の高さを振り返ってみましょう。濃尾平野は0~10メートル位、熱田台地も笠寺台地も標高10メートル位の高さでしょう。少し進んで鳴海丘陵の入口、一番高かった嫁ヶ茶屋付近でも30メートル位です。そこからいったん10メートル位の相原に下り、二村山の峠の60メートルまでの上りは、歩いていても上ったなという実感があります。

そこに伊勢・三河から尾張・美濃と360度の展望があって、街道を来た人には軽いながらも感動があったように思えます。もちろん良いことばかりではありません。天候や盗賊の危険性という緊張感もあったでしょう。

二村山は国の境ではありませんでしたが、来し方には尾張の国、行く方には三河の国が見え、当時は強かった国境のイメージが重なったと考えられます。そして、二村という語感も加わって、二村山は中世のロマンの地として、歌に詠い継がれてきたのではないでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①旧参謀本部編纂『日本の戦史1』(1965、徳間書店)
- ②尾藤卓男『平安鎌倉古道』(1997、中日出版社)
- ③加納誠『旧街道のなぞに迫る・緑区1』(2005、自費)